

高松塚古墳の保存・活用に関する状況等について

1. 壁画の劣化原因調査について

高松塚古墳は、昭和47年の壁画発見以降、特に昭和55年から59年頃と、平成13年から17年頃の2つの時期に、壁画面を含む石室内に多量のカビが発生した（昭和のカビの大発生、平成のカビの大発生）。

平成20年度から2ヶ年にわたって、考古学・美術史学・保存科学・微生物学・材料科学・文化政策等の専門家によって構成された「高松塚古墳壁画劣化原因調査検討会」を設置し、高松塚古墳壁画の科学的・学術的な調査を進めてきた。

壁画劣化の原因は、例えば、過去の地震でできた地割れや亀裂からの水やムシの侵入、修理に使用した樹脂や薬剤がカビ発生の一因となっていたこと、保存施設の空調機能の不具合や多数の人が石室内に出入りしたことなどにより石室内温度が上昇したことなど、複合的な要因によることが指摘された。

2. 墳丘から取り出された壁画の保存・活用について

(1) 壁画の修理作業について

平成19年4月から8月に行われた石室解体作業によって、墳丘から取り出された壁画・石材は、国営飛鳥歴公園内に設置した国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設で保存管理することとした。現在は、応急的な修理作業を経て、壁画の劣化状況の記録の作成や壁画面の強化などの修理作業を行っている。

(2) 修理作業室の一般公開について

仮設修理施設では、平成20年度より、春・秋の年2回、修理作業室の公開を行っており、平成22年度は、5月8日から16日までの予定で一般公開を行っている。



3. 古墳の整備・活用について

平成19年に石室を解体し、墳丘から壁画・石材を取り出した後、仮整備を行った。推定される古墳の外見を見学者が体感できるよう、保存施設の解体・撤去を経て、発掘調査成果をもとに墳丘及び周溝等の外形を復元することとした。平成21年10月には整備工事が完了し、一般公開している。

